

〔翻 訳〕

シ ア ク 王 国 誌

3. 住民区分

H. A. ヘイマンス・ファン・アンローイ

(訳) 深 見 純 生*

訳者序文

本稿は本誌前号に引き続き、「シアク王国に関するノート」の第3章「住民区分 Bestanddeelen der Bevolking」(pp. 311-353)の翻訳である。第2章ではこの王国の領域区分が複雑なことをみたが、その上に住む住民はさらに複雑多様である。支配者に対する権利と義務のありようを中心に叙述されている。住民集団が細分化され、数十から数百家族でひとつの集団を形成するのも珍しくない。こうした小集団がどのようにして安定的に存続できるのか、本稿からは必ずしも明らかでないが、住民集団のありようは固定や定住でなく変化や移動の位相で捉えるべきであろう。

原著者ヘイマンス・ファン・アンローイの経歴について(つづき)。いくつか追加できることがある。1889年版RA (p. 108)によれば、1887年7月1日づけでスマトラ東海岸州(州都メダン)のメダン地方裁判所 Landraad te Medan の判事に就任している。専任の裁判官ではなく、内務官吏としての兼任と思われるが、未確認である。おそらくこの1887年7月

* 本学文学部

キーワード: Siak, Melayu, History

1 日づけで州都がブンカリスからメダンに変更され、これに伴ってメダンに転勤したと推定されるが、これも未確認である。翌年の1890年版 R A (p. 109-110) ではもはやこの判事の任にない。1894年版 R A (Ⅱ, p. 122) によれば、公証人 notaris 資格試験に合格した官吏のリストに名前がある。少なくとも1893年頃まで内務官吏であったことがわかる。

本稿で住民は大きくアナク・ウンパト・スクとスルタン直属の臣民に区分され、後者がさらに細分化されている。後者のうち、とくにハンバ・ラジャについて叙述に若干の混乱がみられる。次に実際の叙述に従って、住民区分を記しておく。なお番号・記号には原文にないものもある。

a アナク・ウンパト・スク

b スルタン直属の臣民

(1) アナク・ラジャ

(2) ハンバ・ラジャ

① シアクの4人のパンフルの臣民

② ハンバ・ラジャ・ダラム

③ オラン・ビンタンおよびオラン・ブラン

④ ジュワク・ラジャおよびハンバ・ラジャ・インジュレイ

⑤ ブキト・バトゥのラクサマナの配下の人々

⑥ プカン・バルのバンドルの配下の人々

⑦ トウラタク・ブルとティガ・カンポンの人々

(3) ラヤト・ラジャ

① ラヤト・タントウラ

(a) オラン・タラン

(b) オラン・ラウト

(c) ブンカリスの4人のバティン

(d) オラン・チェドゥンとオラン・スングラン

② ラヤト・バナシ

- (a) オラン・サケイ
- (b) オラン・アキト
- (c) オラン・ウタンとオラン・ラワ

シアク王国誌

第3章 住民区分

ミナンカバウ人と王の直接の臣民

第1章の歴史的概観からすでに明らかなように、シアクの住民は非常に多様な構成であり、このことは彼らの出身地に関わると同時に、彼らの社会的地位にも関わっている。

ラジャ・クチルがシアクにくる以前から大勢のミナンカバウ人が住んでいた。ジョホール・リアウ王家のスマトラ東海岸における主邑であったブワタンに、ミナンカバウの王によって3人のパンフルが任命されていたほどである。リマ・プル、タナ・ダタル、パシシルの3人のパンフルの任務は、シアクに滞在したり通過したりする同胞の保護であった。今日流に言えば領事といったところである。こうしたパンフルたちはスナプラン（のちのプカン・バル）にもおかれていた。

1761年に放逐されることになるスルタン・モハマド（ラジャ・ブワン）の治世に、王の居所がブワタンから現在のシアク・スリ・インドラプラに移された。その際、この新しい都にカンパル地域出身者のための同様のパンフル1人が加えられた。いつスナプランにカンパル人のパンフルがおかれたかは不明である。

シアクがジョホールのラジャの支配下に入ったのちに、多くのジョホール人が徐々に移入してきたことも確かである。しかし彼らは、独自の立場

をとったミナンカバウ人よりは元来の住民と混じり合ったようである。

ラジャ・クチルがジョホールからシアク王国を奪ったのは、とくにそこに住む多数のミナンカバウ人の援助によるものであったために、このミナンカバウ人が征服地における取り分を確保したのは当然であった。しかしながら、彼らは土地を手に入れなかった。土地はラジャ・クチルがくる以前に占取していた住民のものであった。

ラジャ・クチルは、シアクに住む高地人（パダン高地出身者）〔ミナンカバウ系住民〕が自分たちの首長のもとにとどまること、したがってラジャから独立しているも同然であることを約束しなければならなかった。そればかりでなく、この首長たちはラジャと共に王の職権を担うとさえ考えられた。ラジャがクラジャアン（kerajaan）つまり王国を体現する者であるとすれば、彼らはティアン・クラジャアン（tiang kerajaan）つまり王国という建物の柱であった。彼らはクラジャアンがなければ無に等しいが、王国は彼らなしには存立しえない。

今日なお初代首長たちの後継者はティアン・クラジャアンを自称することを喜びとしている。彼らは、表面的な観察によってマレー人の王の下ではありえないと一般に考えられている以上に、また彼らを排除しようとする王の側からの試みにもかかわらず、以前からの独立の地位をかなりよく保持し続けている。

他方、ミナンカバウ出身者以外はすべて王の直接の臣民であり、ラジャ・クチル以来の歴代スルタンは彼らを恣意的に扱ってきた。スルタンはミナンカバウ系住民をいつも尊重しなければならなかったが、その他の人々は王の心のままに従属した。その結果、一般的にいて、最も富裕な人々はミナンカバウ系住民の中にみられる。ミナンカバウ系住民の利益がどれほど守られるかは、当然スルタンの性格とミナンカバウ人首長たちの活力の度合によるが、その他の住民の場合には、統治の公正さと古くからの制

度が尊重される度合は、もっぱらスルタンの性格にかかっていた。

以上のことから、シアクでは絶対権力と民主主義的な構成要素とが混在すると考えるのは、少なくとも我々の観点からは、間違いであることがわかる。スルタンは直接の臣民に関しては、他のマレー人ラジャと同様、絶対的な支配をおこなう。確かにスルタンが尊重すべき古い制度というものがあるが、こういうものが存在しない所が世の中にあるだろうか。

ミナンカバウ系住民が最も良い地位にあることは否定すべくもないが、彼らは本来シアク人ではない。くわえて、彼らの首長たちはラジャほど権力を乱用することができず、またあえてしようとしない。それは第一に、首長たちの地位と出自があまり高くないからであり、第二に、彼らの不当な行為はスルタンへの上訴に持ち込まれる可能性がつねにあるからである。

ミナンカバウ人移住者を混血の方向に向かわせなかったもうひとつの事情は、彼らの首長が同じ国から来た人々の中から出ることである。その結果、首長たちは配下の者との一体感をもつ。その上、彼らは王ではなく首長であって、彼らと配下の人々の間の関係に家父長的な要素があるのは紛れもないことである。配下の人々もまた、スルタンが有するようなハンバ（hamba）とかラヤト（rayat）つまり臣民ではなく、アナク・ブワである。

これに対して、シアクの歴代ラジャは他所の出身であって、王は臣民の中から出るのでなく、王は臣民を自分に従属させる。臣民は同胞ではなく従属民である。このためマレー人ラジャと臣民を隔てる距離はそもそもきわめて大きく、サイドが王座に登ると〔サイド・オスマンの系統が王位を得たことを指す〕さらに大きくなった。

シアクに2つのカテゴリーの人々がいることは以上で十分に示されている。スルタンの直接の臣民と、ミナンカバウ系住民つまりアナク・ウンパト・スク（anak IV suku）である。どちらもさらに下位区分がある。まずミナンカバウ系住民から述べよう。

a アナク・ウンパト・スク

4 スクのなりたち

パダン高地出身者は、リマ・プル、タナ・ダタル、パシシル、カンパルの4つのスクに分かれる。

シアクがまだジョホールに属していた時から、高地出身者は独自の首長を有したが、当時彼らはパンフルの称号をもつにすぎなかった。ラジャ・クチルがシアクの王座を獲得したのち、ミナンカバウ人はより大きな自治権を得、首長たちはダトゥクの称号を得た。しかしダトゥクたちは、ジョホール宮廷の職務を帯びていたかつてのパンフルではなく、ラジャ・クチルを援助したミナンカバウ人の主要人物（各スクから1人）であった。スク・リマ・プルのダトゥクはグンティン（Genting）出身、スク・タナ・ダタルのダトゥクはスマニク（Sumanik）出身、スク・パシシルのダトゥクはシアノク・コタ・グダン（Sianok Kota Gedang）出身であった。

これらの配下の人々は、ミナンカバウのアダトというスクのメンバーではなく、同じ地方、換言すれば同じルハクの出身者であった。海岸に至るまでの全後背地を含むルハク・アガム出身者全員が、シアクの意味でのスク・パシシルに属した。パシシルという命名はこれゆえである。スク・タナ・ダタルを構成したのはパダン高地南部、スク・リマ・プルはパダン高地東部の出身者である。

当時スク・カンパルはまだ存在しなかった。ラジャ・イスマイル（マルフム・マンカト・ディ・バレイ）が2回目に即位した時に初めて独立のスクに格上げされた。したがって1780年頃のことである。それまで彼らはスルトンの直接統治下にあり、シャーバンダルがスルトンの名において彼らを統治していた。中部スマトラ出身のマレー人で上記3スクに属さない者がすべてこのスクに属する。たとえばジャンビ川上流、インドラギリ川、カンパル川の人々である。

シアク王国誌

諸スクの成員の一部は出身地から直接やってきた。一部はジョホール経由でやってきた。ジョホールでも多くのミナンカバウ人が定着に成功し、そこで結婚していた。その一部がラジャ・クチルのシアク征服の時、彼の側についた。それゆえ4スクの諸氏族の成員の大多数が父親の血筋でのみミナンカバウ人であって、母親の血筋ではシアク系ないしジョホール系である。

パドリ運動の影響

同様に純粹のミナンカバウ人女性もシアクにきた。第一に、もともと近親者や夫と共にシアクにきた女性がいるが、はるかに多くは、ずっとのちにパダン高地でパドリ (Padri) たちが引き起こした騒乱の時になってシアクに移ってきた。彼女たちの多くは、ナン・ランチク (Nan Rancik) の狂信的暴力から逃れるために、シアクに移住したのであった。

ミナンカバウ人はしばしば、自分たちの古い制度、とりわけ家族法と相続法に関わる制度を守るためにパドリ派に抵抗したといわれる。このミナンカバウ人は、当然にもまた正当にも、彼らより前にシアクに定着していたミナンカバウ人に合流したが、古いミナンカバウ人移住者の子孫の例に倣って、シアク定住後直ちにもとの制度に従ったのは当然である。他方、それが成功したのは明らかに、彼らが独特のアダトの保持を強く欲したからである。こうした現象から、パドリ派が住民から抵抗を受けたのは、コーランの定めを旧来のアダトに代わるものにしようとする彼らの活動に対する反対よりも、パドリ派が間違った行為と呼んだもの、とくに喫煙、シリーを噛むこと、闘鶏など、パドリ派の目には死刑に値するが、多くのマレー人の愛好することがらに対する厳格な姿勢への反対の方が重要であったと考えうるかもしれない。

4 スクが維持された要因

シアクにおいてミナンカバウ人のスク（ルハク）がどのようにして保持されたか、少し考えてみる必要がある。これが必要なのはとりわけ、シアクにきたミナンカバウ人が、とくに初期において、たいてい男性であったこと、そしてシアクにおける考え方では、相続は男系でおこなわれるけれども、子供は父親のスクでなく母親のスクに帰属するからである。したがって、ミナンカバウ人がシアクの女性との間にもうけた子供は、4 スクのメンバーではなく、純粋にシアク人であると規定しうるのである。

にもかかわらず、シアクに4 スクのアナク・ブワが相対的に多くみられること、とくに過去において多かったことは、いくつかの要因から説明できる。

第一に、既述のごとく、若干のミナンカバウ人女性が一緒にきたことが明らかである。

第二に、シアクにおいて、かつてのダトゥクの地位を占めた女性の一族や従者は、男であれ、女であれ、そのダトゥクのスクに移るものと考えられた。こうして、かつてのダトゥクの1人が結婚したカンボンの全体が4スクへと移行した。この方法によって得られた女性の子供たちは現在4スクに属する。

さらに、ダトゥクの子供は、母親の出自に関わりなく、父親のスクに帰属するという慣習がずっと保たれてきた。この方法も当然女性の重要な供給源であった。

最後に、ブキト・バトゥの若干部分および島々において支配的な、いわゆるアダト・プランタウアン（adat perantauan）では、奇数番目の子供は母親、偶数番目の子供は父親に従う。これによって4スクに属する女性が現れている。

以上のことから、一般にシアクでは元来の住民の相続がコーランの定め

によりよく一致するのに対して、4 スクのメンバーはミナンカバウのアダトに従っていると考えられているが、これが誤っていることがわかる。逆に考える方がはるかに真実に近い。

4 スクと税

4 スクの由来からして当然のこととして、彼らは土地ウタン・タナを所有しないことになり、その結果としてシアランも所有しない。4 スクのメンバーはシアク全域に住んでいるが、多くが主邑シアクに定着した。彼らのラダンはいいていシアク川沿いにみられる。

1863年にパンチョン・アラスが、またこれとともにタパク・ラワンも廃止されたのち、彼らは税を納めていないも同然である。以前はジョホール支配時代からすでにスク・パシシルだけがタパク・ラワンの支払いからベバス (bebas) つまり免除されていたが、これはジョホールの最初の王スリ・トリ・ブワナ (Sri Tri Buwana) の船が難破したために失われた最初の王冠に代わる王冠を作る際に、彼らが示した忠勤に対する報償として与えられたものであった。同じ機会に彼らが得たもうひとつの特権は、合図の銅鑼が鳴らされる時に、彼らにはけっして通報したり招集したりしないことである。

政庁にはスルタンに賠償を与えてパンチョン・アラス (スルタンは本来これに対する権利をもたない) を廃止する意志のないことを、ダトゥクたちがよく知っていたことは明らかである。しかし、彼らのスクのメンバーがこれに少なからざる利害を有したので、ダトゥクたちはけっしてこの不法を正そうとはしなかった。

この国は自らの血と武器でもって征服したのであるから、政庁の到来以前、彼らのアナク・ブワはまったくパンチョン・アラスを納める必要がなく、はるかに少ないタパク・ラワンを納めれば十分であったというのが、

ダトゥクたちの主張である。この主張に対し十分な根拠のある反駁はできず、とりわけスク・パシシルが古くからタパク・ラワンを免除されていたことを考えるならば、やはりありえないことではない。

彼らが王に対して果たすべき唯一の義務つまりプサカ (pusaka) は、戦争の場合にとともに立ち上がることである。ダトゥクは各々 1 隻の武装したブラウつまりペンジャジャブ (penjab) を提供しなければならない。銃だけはスルタンから供給される。コタ・インタンとの戦争では、各ダトゥクが人民の他に、1 箱の銃を供出した。彼らはまたアスタナ (astana) つまりスルタンの住居が新築される時に、現金を貢納しなければならないが、その額は 1 家族あたり数ドルにすぎない。最近のスルタンの宮廷の建設にあたって、各ダトゥクは 200 ドル納めなければならなかった。

スクの成員とダトゥクの関係

スクのメンバーのダトゥクに対する義務は、主として、スルタンの命令によるものであれ、ダトゥク自身の発意によるものであれ、ダトゥクの旅行のお供をすることである。彼らは船を動かし、従者としてダトゥクのお供をし、ダトゥクの世話をしなければならない。また祝祭がおこなわれる場合には、ダトゥクのカブサランとしてダトゥクのお供をしなければならない。

アナク・ブワはまたダトゥクが家を建てる時、これを手伝わねばならないが、この義務は細かく定められておらず、幾分とも家父長的なダトゥクの地位に由来するにすぎないので、人々の感情によって決まるものである。ダトゥクが首長としてもつ権利以上のものをアナク・ブワから取り立てるのは容易でなく、またアナク・ブワが、アダトによって義務づけられているダトゥクのための役務を免れるのも容易でない。

ダトゥクには自分のスク・メンバーを 20 ドル以下の罰金に処す権限があ

る。20ドルを越える場合はカラパタン (karapatan) によって裁定される。ダトゥクがこの権限を行使するのはきわめて稀である。ダトゥクがこれを、マカン・アナクニャ・スンディリ (makan anaknya sendiri) [自分の子供を食べる] つまり自分のスク・メンバーの犠牲の上に自分の腹を肥やすことで、あまり許されないことと考えているからである。

ダトゥクの任命、チャプ＝職印

ダトゥクの職が空白になると、その死亡したあるいは解任されたダトゥクの血族およびその他の富裕なスク・メンバーが、後継者を決める相談をおこなう。相談がまとまると、選ばれた者はスルタンの前に伺候し、その承認を得なければならない。スルタンの気に入らない場合には、他の者を選びなおさなければならない。スルタンが同意したら、他の3スクのダトゥクの意見を求める。

このダトゥク候補者は、しばらくの間（ふつう約1年間）仮に任務をおこない、そののちに正式に就任し、任命勅書と職印つまりチャプ (cap), そして職務の称号つまりグラル (gelar) が与えられる。スルタンはまたこの機会に、肉色のジャケット1, 同じくカイン (kain) 1, 同じくカイン・カスンバ (kasumba) の頭巾1を贈り物として与えるのが慣習である。チャプでは、4スクのダトゥクは、ワジル・スルタン (wazir Sultan) [スルタンの代理人] と呼ばれている。

以前は4スクのダトゥク、ブキト・バトゥのラクサマナ、プカン・バルのバンダル、シアクのシャーバンダルだけがチャプを与えられていた。これらのチャプでは、シアクのシャーバンダルがワキル・スルタン (wakil Sultan) [スルタンの代理人] と呼ばれる以外はすべてワジル・スルタンであった。現在では2人のビンタラとマハラジャ・デワ (Maharaja Dewa) もチャプを与えられている。

ダトゥクの権力が及ぶのは、プカン・バルのバンダルの地域とブキト・バトゥのラクサマナの地域を除く、狭義のシアクに住むすべてのスク・メンバーである。

プカン・バルの4人のパンフル

プカン・バルに4スクの頭に立つ4人のパンフルがいる。彼らはシアクにいるダトゥクたちより地位が低いが、ダトゥクに従属しているとか支配されているとか（ダトゥクはつねにこれを欲しているが）考えることはできない。これらパンフルは明らかに、かつてミナンカバウのラジャによって、おそらくブワタンにあったジョホール＝シアク宮廷における同様のパンフルたちと同時に、同じ目的をもって、つまりそこを通過する同胞の権利を守るために任命されたものである。プカン・バルにおけるこうした擁護者の必要性は、ブワタン以上ではないとしても、少なくとも同じくらい大きかった。旅行者たちがプカン・バルに滞在するだけでなく、そこでシンガポールやマラッカへの船便を確保しなければならなかった。彼らにとってブワタンは単なる通過地であった。

これらパンフルを任命するのは、ダトゥクでなくスルタンである。ただしスルタンは任命にあたって、当該スクのダトゥクの意見を聞く。彼らの任命勅書の中でパンフルのダトゥクに対する関係について、唯一第4条において、パンフルはシアクのダトゥクとともに“mengikut dan menurut sapanjang adat pusaka”〔伝来のアダトに従う〕と述べられているだけで、他方ダトゥクの任命勅書ではこうしたことは何も述べられていない。したがって、パンフルの義務は、自己の行政行為をシアクのダトゥクのそれに一致させることだけである。

プカン・バルの4スクのパンフルの収入はかつて次のものから成っていた。

シアク王国誌

1. プカン・バルで徴収される通過税における取り分
2. プンゲルタン (pengeretan) つまりトルブク魚の関税における取り分
3. アヘンの小売
4. 4 人のパンフルで 1 隻の、商品を載せたブラウのシアクにおける免税
5. 罰金における取り分

これらの収入源は、ほとんど意味のない 5 を除いて、次々に奪われた。

1 と 2 は 1878 年に、スマトラ東海岸州理事官によって、1858 年の条約に反するとみなされたため廃止された。3 は同じ時に、マンダウ川のクワラより上流におけるアヘンの原住民行政による販売権がなくなったため廃止された。4 は、輸出入関税が政庁に譲渡された際に（この時このパンフルたちのことは念頭になかったようである）彼らから奪われた。

彼らの王に対する主な義務は、戦争の場合に 1 隻の武装したブラウつまりブンジャジャブの提供、および大きな祭の際に 4 人で 2 頭の水牛の提供である。

4 人のパンフルの配下の人々は合計約 200 家族と推定される。

これらパンフルの裁判権は 2.40 ドルつまり 10 レアル (real) ままである。プカン・バルのバンダルと 4 人のパンフルが構成するプカン・バルのカラパタンが 4 スクのメンバーに対して 20 ドルまでの裁判をおこない、それ以上の場合はシアクのカラパタンによって裁かれる。

その他ミナンカバウ人に關すること

ダトゥク・ラクサマナの地域に住む 4 スクのメンバーは、シアクのダトゥクの代行者としてのダトゥク・ラクサマナの下にある。これは彼らの数が少ないこと、およびそこでは子供の帰属に関してシアクと異なるアダトが支配していることの結果である。奇数番目の子供は母親に、偶数番目の子供は父親に帰属するというアダトの結果、スク（シアク的意味でのスク）

は純粹でなく、他所では4 スクに属さない人々が4 スクに属している。

シアクの各スクの人口は、現在計算中のプカン・バルを除いて、おおまかな推定でリマ・プル約800、タナ・ダタル約150、パシシル約600、カンバル約1000人である。近年多くの人が他所へ出ていったが、そのうちのある者はブンカリス島に定着したため、政庁の臣民である。

ノバト

特殊シアク的アダトで、シアクの4 スクのダトゥクに関わりがあり、同時に一種のカブサランをもたらす（それゆえここで述べるに値する）アダトは、いわゆるノバト（nobat）である。ノバトは一種のオーケストラであって、首にかける2つの太鼓と1つのスルネイ（serunei）つまりマレーの一種のクラリネットである。

このオーケストラは王の重要な祝祭にのみ演奏が許される。その場合、数日連続して朝と夜に半時間ずつおこなわれる。演奏されている間、これに近づいてはならず、違反者は0.36ドルの罰金に処せられる。この罰金はオラン・ビンタン（orang Bintan）とオラン・ブラン（orang Bulang）（後述）のものになる。もちろんこの罰金は刑罰というのではなく、楽しみとしておこなわれる。ノバトが終わるとすぐに9発の祝砲があり、ついで出席者全員にクウェ・クウェ（kwee-kwee）やその他のお菓子が供される。

演奏者はスク・サワン（Sawang）（後述）の者でなければならない。レパートリーは、タンギス・タンギサン・ナガ（tangis-tangisan Naga）つまり竜の涙、アラビア語ではイブラヒム・カリル（Ibrahim khalil）（?）、およびアラク・アラカン（arak-arakan）つまり行進という2つのラグ（lagu）である。スルネイはメロディーを与え、太鼓の1つはいわゆるムンジャラル（menjalalu）つまり補助をし、もう1つはムニンカ（meningkah）つまり強勢のある音ののちに打つ。

シアク王国誌

ノバトの演奏が始まるとすぐに4人のダトゥクは立ち上がり、いわゆるタンパン・タンパン (tampan-tampan) で身を飾り、演奏終了まで立ち続けていなければならない。彼らの妻も、スルタンの女性居所で同じようにしなければならない。タンパン・タンパンというのは、長い黄色い布で、ダトゥクは祭の際、その職のしるしとして左肩にかける。

b スルタン直属の臣民

スルタンの直属の臣民は次の3つのカテゴリーに分けることができる。

- (1) アナク・ラジャ (anak raja)
- (2) ハンバ・ラジャ (hamba raja)
- (3) ラヤト・ラジャ (rayat raja)

(1) アナク・ラジャ

歴代の王の子孫は全体として貴族を構成し、また独自のスクをなし、マンクブミがこのスクの長である。彼らは主として主邑シアクおよびトゥビン・ティンギ島のトゥビン・ティンギに住む。彼らのうちの若干の者つまりスルタンの近親者は、スルタンから生活費として固定的な収入を与えられるが、その他の者はスルタンの慈悲に依存している。

彼らについて、たいていのマレー諸国の王族についていえること以上はいえない。労働によって生活するには生まれが高すぎると自認しており、自らの勤勉によって良い生活を獲得するよりも、慈悲で与えられる食べ物による苦しい生活を選ぶ。自分の債務奴隷にラダンを開かせる者も若干はいるが、彼らのすることもここまでである。

女性の王族の地位はとくにひどいものである。それは主として彼女たちがサイド (Said) であるため、サイドとしか結婚できないことによる。そのため未婚のままで、そして例の方法で（それが何であれ）生活の糧を得

なければならない。

約150人のアラブ系の人々（その若干はサイドである）もマンプミの管轄下の、特別なスクを構成する。

ハンバ・ラジャとラヤト・ラジャ

その他のスルタンの直接の臣民をオラン・カバニヤカン（orang kaba-nyakan）といい、ハンバ・ラジャとラヤト・ラジャの2つに分かれる。その区分の基準はまだ明らかにできないが、イスラムへの帰依の深浅に求めざるを得ないように思われる。ハンバ・ラジャは全般に良いムスリムであり、彼らの大部分は、おそらくムハマドの教えの精神にひたりきっているわけではないが、外面的な宗教上の義務をかなり忠実に守っている。ラヤト・ラジャはムスリムでないか、名目のみのムスリムである。それゆえあまり尊敬されていない。シアクのオラン・ムラユについて語る時、ふつう彼らをこれに含めず、彼らは王国内で彼らが居住する部分の名前によって呼ばれる。

ラヤト・ラジャはアダトによれば、ハンバ・ラジャと一緒に食事をする事が許されず、ハンバ・ラジャは娘をラヤト・ラジャに嫁がせない。

近時この区別はそれほど目立たなくなり、少なくとも両者の間の結婚がみられる。

(2) ハンバ・ラジャ

ハンバ・ラジャはさらに次のように区分される。〔訳注＝実際の叙述と食い違いがある。〕

- ① シアクの4人のパンフルの臣民
- ② ハンバ・ラジャ・ダラム（dalam）
- ③ オラン・ピンタンとオラン・ブラン

シアク王国誌

④ トゥラタク・ブルとティガ・カンボンの人々

① シアクの4人のパンフルの臣民

シアクの4人のパンフルの臣民は、前記aの地域〔第2章領域区分a＝4パンフルの領域〕に住む。彼らはラジャ・クチルのシアク到来以前からそこに住んでおり、当時はジョホールのラジャの臣民であった。サバ・アウルのシャーバンダルがジョホールのラジャの名において彼らを統治していた。

伝承によれば、この4人のパンフルは、当時はまだ存在せず、ラジャ・クチルのシアク到来後に初めて、ラジャ・クチルが解任したシャーバンダルの子孫の中から、ラジャ・クチルが任命した。このシャーバンダルが主人の命令によって、当時まだ冒険者であったラジャ・クチルの通過を拒否したために解任されたことは、第1章で述べたとおりである。

4人のパンフルは、このシャーバンダルの時代に、またそれ以前から存在した可能性の方が大きい。とはいえ、シャーバンダルはジョホールの官吏だが、パンフルはジョホールに従属するシアクの住民の首長であったと思われる。

それはともかく、ラジャ・クチル以後、サバ・アウルのシャーバンダルが存在しないことは確かであり、またそれ以来4人のパンフルがシアク下流沿いの住民を統治したことも確かである。4人のパンフルとは、シアク・クチル、ルンパ、シアク・ブサル、プトウンのパンフルである。

ビンタラとその収入

彼らはスルタンに直接従属せず、彼らの上にビンタラという称号をもつ2人の官吏がスルタンによって任命されている。2人のうち上位がビンタラ・キリ〔左〕、下位がビンタラ・カナン〔右〕である。ビンタラ・カナ

ンからビンタラ・キリに昇進することがある。

ビンタラの1人はシアク・クチルまたはルンパの出身、他の1人はシアク・ブサルまたはブトゥンの出身でなければならない。彼らはビンタラに任命されるとスクを離脱する。その子供たちは、自分自身がビンタラにならないかぎり、ジュワク・ラジャ (juwak raja) (後述) に合流するが、これはビンタラの子孫がパンフルの下に戻されることがないようにという配慮からである。

2人のビンタラのうちの1人(現在はビンタラ・キリ)の下にシアク・クチルとルンパのパンフルがおかれ、他の1人(現在はビンタラ・カナン)の下にシアク・ブサルとブトゥンのパンフルがおかれる。スルタンから4人のパンフルへの命令は、ビンタラによって伝えられ、その実行はビンタラが担当しなければならない。

さらにビンタラは、この称号がすでに示しているのだが、一種の王国紋章官であって、したがって祭祀の際に儀式を担当しなければならない。

人民に王命(とりわけ新任の首長と高官の称号に関して)を宣しなければならない時、それはビンタラの口をとおしておこなわれる。

ビンタラの収入は、以前は任命勅書において定められ、通常ある1つのスンゲイあるいは内陸住民の一部分のスラハン交易の収入が充てられた。たとえばビンタラ・ジョベイとビンタラ・ジャヤ・パフラワンには、かつてスンゲイ・ラワが与えられた。現在のビンタラ・キリは任命された時、スンゲイ・マンダウ沿いで鉄と塩を独占的に販売する権利が与えられ、またこのスンゲイから輸出されるすべての森林産物から10%の関税を徴収する権利が与えられた。後者は任命勅書の中でパンチョン・アラスと呼ばれているが、純粋に輸出関税であるので、これは不当なことである。現在のビンタラ・カナンは任命された時、オラン・ダユン(オラン・タラン)に塩を独占的に販売する権利を与えられた。鉄について述べられていないが、

同じ権利をもつと考えられていたようである。同じ勅書においてオラン・ダユンはビンタラ・カナンの管轄下におかれた（後述）。

パンチョン・アラスが廃止された時、上記のビンタラの収入は否定され、彼らには年額500盾のサラリーが与えられた。他方プルタランガン・ダユンにおけるスラハン交易はトンク・スルン・ヌガラに、マンダウ川沿いのそれはトンク・ウヌス（Unus）に与えられた。前者はスルタン・イスマイルの正室との間の息子、後者は側室との間の息子である。

4 人のパンフル

4 人のパンフルの収入は、かつてはタパク・ラワンつまり各々の地域内に設けられたラダンから1家族あたりバディ10ガンタン、およびパンチョン・アラスつまり自分の地域内で採集された森林産物の10%であった。パンフルにはまた、配下の人々を10リアル・ドゥウィト・ニピス（reaal duwit nipis）つまり2.40ドルまでの罰金に処する権限があったが、これはまったく行使されたことがない。それは、第一に人々が悪事をおこなわず、第二にパンフルは少数の配下の人々の犠牲の上に自己の利益を図るのを欲しなかったからである。

パンフルの職に空白が生じると、ふつう前任者の一族（息子または兄弟）から当該のビンタラによって後任が指名され、スルタンによりスラト（surat）つまり任命勅書をもって確認される。その際、新任者はスルタンからサロン（sarong）、ジャケット、頭巾各1からなるプルサリナンを賜る。

パンフル配下の人々の義務

パンフルの配下の人々は、あらゆる種類の仕事を大量にこなさなければならない。彼らは必要な橋、船付き場、水浴用の筏を作らなければならない、祭などの機会には掛け小屋を作る（その材料は自分で出す必要はない）。

彼らはまた祭の際、王の居所を飾り、客のための飲食物を準備し給仕しなければならない。男が男の客、女が女の客を接待する。彼らは求められれば、スルタンの旅行のお供をし、スルタンのプラウを漕がなければならない。もちろん戦争の場合には闘いに加わらねばならない。また結婚の際には新郎の側に4人の男、新婦の側に4人の女がムンジャワト (menjawat) しなければならない。これは一種の儀仗兵として、婚姻が結ばれた日から本当に夫婦として生活し始める日まで、日夜見張りをおこなうのであるが、時に数ヵ月に及ぶことがある。

こうした全役務がけっして取るにたりないものでないことは、このパンフルの下にある人数の少ないことを考慮に入れるなら、明らかである。たとえばスルタンが1878年3人の息子の割礼と2人の娘の結婚の祭をおこなった。この間、このパンフルの下の義務のあるすべての人々が、男も女も13ヶ月にわたって上記のように「祭を祝」わねばならなかった。その結果、彼らはこの年ラダンを作ることや生計のための仕事をできなかった。

プングタン

この項で述べているカテゴリーの人々、まさにこの人々だけが犠牲になる恐ろしい慣習がいわゆるプングタン (pungutan) である。これは新スルタンの即位の際、あるいはスルタンが欲した時に、4人のパンフルが各々4人の処女を、イシ・アスタナ (isi astana) として供出する義務のことである。彼女らは、債務奴隷がおこなうような重く激しいものを除いて、王の居所におけるあらゆる家内労働に服さねばならない。彼女たちは奴隷とあまり変わらず、また選ばれたならば、もちろん礼儀正しくスルタンとその血縁者の意のままにならなければならない (アダトはこのようなことを禁じているのだけれども)。

彼女らはダヤン (dayang) になるや、つまりスルタンに提供されると指

名されるや、すみやかに一族およびスクからまったく離脱し、スク・ハンバ・ラジャ・ダラムのメンバーになる。彼女らが結婚する時、彼女らの婚資はスルタンに支払われる。ダヤンはパンフルが指名する。一旦指名されたら、それを免れさせようとするのは処罰の対象になる。娘をダヤンにしたい親がいないのは自明である。新スルタン即位の見通しが生じると、その対象になるはずのない年齢の者まで含めて、ただちに全ての若い娘の処女が奪われる。

こうした捨てるに惜しくない体制から逃れるために他所へ行ってしまう人がいるのも当然である。

4人のパンフル全体でも、人口は300～400家族つまり約1600人以上ではないだろう。彼らの出生力はもともとあまり大きくないのだが、スルトンの即位ごとに16人の娘をスク・ハンバ・ラジャ・ダラムに移行させるため、その力は大きくなり、この結果、数世代後には4人のシアクのパンフルが消滅することも十分ありうることである。

② ハンバ・ラジャ・ダラム

この人々は元来ラジャ・クチルがシアクを征服した時の彼自身の従者からなっていた。その中には彼の遠征の途中で加わったあらゆる種類の出身の者がいただろう。しかし大部分は、彼がジョホール王位を取ろうとした際に彼に加わったジョホール人であった。

この人々もラダンをシアク川沿いの全部に設けるけれども、たいていはスルトンの住居の近くに住んでいる。彼らはスルタンとの関係では、ダヤンを提供する義務がないことを除いて、全般にハンバ・ラジャ・ウンパト・パンフルと同じ義務をもつ。彼らは一般に尊敬されているので、良い地位にある。彼らの長はマハラジャ・デワという称号をもつダトゥクであり、スルタンから年額1000盾の給与を与えられる。

③ オラン・ビンタンおよびオラン・ブラン

オラン・ビンタンとオラン・ブランがハンバ・ラジャ・ダラムの一部分をなしている。その一部は主邑シアクに、一部はプチャ・ティマ (Pecah Tima) に住む。彼らは明らかに、リアウ・リング諸島のビンタン島とブラン島出身の、ラジャ・クチルの従者の子孫である。彼らは当時うまく立ち回った、少なくともこの王に有利に行動したようである。というのは、戦争に加わることの他には、王に対する彼らの唯一の役務は銃を撃つことだけである。これは今では当然、祭や宗教関係の儀礼の場合にのみおこなわれる。その他、王家の結婚の際に、ノバトがおこなわれている間、4人の女性が新婦のベッドの側で儀仗兵を勤め (ムンジャワト) ねばならない。

現在オラン・ビンタンに属するのは約200人、オラン・ブランは約100人ほどであろう。

④ ジュワク・ラジャおよびハンバ・ラジャ・インジュレイ

さらにジュワク・ラジャ (juwak raja) とハンバ・ラジャ・インジュレイ (hamba raja injelei) もハンバ・ラジャ・ダラムに含めるべきであろう。

ジュワク・ラジャは楯持ち (騎士の従者) または小姓と訳されるが、シアクではいささか異なる意味あいをもつ。つまりスルタンとその一族の身の回りの従者であって、近習というのではなく、乳母、マンドゥル (mandur), ジュラガン (juragan), 書記, 剣持ち, シリー箱持ち, タリ・アピ (tali api) 持ち等々である。彼らは歴代ビンタラの子孫であって、王国高官の子孫なので (自分がビンタラになるのでないかぎり) パンフルの下に戻されることはなく、ジュワク・ラジャとしてスク・ハンバ・ラジャ・ダラムに含まれる。彼らの数は約300人と推定される。

ハンバ・ラジャ・インジュレイは元来4スクに属していたが、いさかやや対立等々何らかの理由でそれを離脱し、スルタンの直接支配下におかれ

た人々である。彼らの人数は非常に少ない。

ブキト・バトゥのラクサマナおよびプカン・バルのバンダル

ブキト・バトゥのハンバ・ラジャはそこのダトゥク・ラクサマナ、プカン・バルのそれはプカン・バルのダトゥク・バンダルの管轄下にある。この2人はスルタンの官吏であるが、その職は慣習によって各々の一族の世襲になっているようである。

⑤ ブキト・バトゥのラクサマナ

ラクサマナの起源に関する物語（これを疑うべき理由はない）によれば、ブギス人のパンリマ・ジャマル（Panglima Jamal）なる者に始まる。彼はラジャ・クチルの2人の息子つまりマルフム・ムンプラ（スルタン・モハマド）とマルフム・ブキト（ラジャ・アラム）の間の戦いにおいて、つねに後者を熱心に支持した。非常に熱心であったため、前者が東インド会社によってシアクの王座に即けられた時、彼は東インド会社に捕らえられ、マラッカで焼印を押された上、何年も鎖に繋がれた。

1759年のゴンタンの裏切りののち、すでに述べたようにラジャ・アラムが東インド会社の援助のもとに、東インド会社の数隻の船が大変苦勞してラジャ・モハマドを放逐したのちに、再びシアクの王位に返り咲いた。とくにブラウ・ゴンタンの少し上流が大木で封鎖され通過困難であった。そこでパンリマ・ジャマルは数人の人とともに水に入り、鋸またはバールで通路を開いた。遠征隊弁務官フィスボーム（Visboom）の報告書は次のように伝えている。

「やがてラジャ・アラムの4人の配下が水に飛び込み、最初の3本の綱を切断した。その後我々は残りの5本の綱を切断した者に30スペイン・レアルを与えると約束した。舵手ファン・エフテン（Van Egten）がこれを

おこなった」〔原注 Netscher 前掲書126頁〕

戦争ののちパンリマ・ジャマルはブキト・バトゥのシャーバンドルになり、生計のためにそこでの塩とアヘンの独占販売権を得た。

ラジャ・アラムの死後、その息子マルフム・プカン (Marhum Pekan) つまりラジャ・モハマド・アリが跡を継ぎ、これが従兄弟のマルフム・マンカト・ディ・バレイつまりラジャ・イスマイル (ラジャ・モハマドの息子) によって追放された時、このブキト・バトゥのバンドルはマラッカに逃れた。明らかに、ラジャ・イスマイルの父の追放に協力したのであったから、ラジャ・イスマイルの報復を恐れたのであった。

彼の息子の1人エンチク・ブラヒム (Encik Brahim) はシアクにとどまった。サイド・アリが従兄弟で義兄弟のマルフム・マンカト・ディ・ドゥンゲン (スルタン・ヤフヤ) を王座から追放した後、おそらくその時サイド・アリの側についたからであろう、エンチク・ブラヒムは父の以前の地位つまりブキト・バトゥのバンドルに任命された。彼の子孫の主張するところでは、このバンドルがすでにサイド・アリから土地を与えられたのであって、彼の死後バンドル職を継ぎ、スルタン・イスマイル (すなわち先代スルタン) によってラクサマナに格上げされた、息子のエンチク・クミス (Encik Khemis) の時ではない。その可能性は否定できないが、エンチク・クミスがスルタン・イスマイルから土地を与えられた可能性の方が大きいようである。

現在のラクサマナとその配下の臣民

エンチク・クミスはなお存命だが高齢を理由に解任され、息子のエンチク・アブドゥラ (Encik Abdullah) が現ラクサマナである。エンチク・アブドゥラは、古い任命勅書はすべてウィルソン騒乱の時に焼かれて現存しないと主張している。彼の主張によれば、現在彼が領有する地区は、西方

シアク王国誌

属領の征服にあたってエンチク・ブラヒムが果たした功績に対する報酬としてサイド・アリから与えられたものであり、その際さらにマハラジャ・レラ・ステシア（Maharaja Lela Setia）の称号も与えられた（第2章h参照）。

ラクサマナが統治する地域に住むスルタンの直接の臣民は、現在彼の直接支配下におかれている。彼らは他のハンバ・ラジャと同様、求められればスルタンのための役務をおこなわねばならないが、その機会は当然スルタンの近くに住む場合ほど多くない。

かつてドメイのパンフルは、タンジョン・バレイからプルバハギアン・アルス（スンゲイ・スヌブイ）までの沿岸に住む元来の住民の首長であった。しかしラクサマナの影響力が拡大するにつれてパンフルの力は縮小し、最近ではついにスンゲイ・ドメイまで後退させられ、その他の地区からの収入は次々にラクサマナの手の中に入ってしまった。ドメイの最後のパンフルはずっと以前に死亡し、その後任はまだ任命されていない。上級権力がこうしたパンフルの存在に注意を払わないならば、それは間もなく過去のものとなるだろう。

ラクサマナは20ドルまでの処罰をおこなう権限をもち、それ以上の裁判はシアクのカラパタンが扱う。

ブキト・バトゥの人々

上にも触れたように、ラクサマナの地域にすむ4スクのメンバーはラクサマナの下にある。これは、かつてブキト・バトゥにはプカン・バルやシアクのようなミナンカバウ人のパンフル（領事）を任命する必要がなく、またその後もスク・メンバーが少なすぎるので任命されなかったことに由来する。ダトック・ラクサマナはシアクのダトックたちの代行者と考えられている。

オラン・ウンパト・スクがブキト・バトゥに存在することは（もちろん他所から移住してきた者は別であるが）、そのラヤト・ラジャの間に存在する、奇数番目の子供が母親のスク、偶数番目の子供が父親のスクに帰属するという慣習によって説明できる。したがって、後者は本来スマンド（semando）婚のアダトによればオラン・ウンパト・スクではない。

ブキト・バトゥのラクサマナの下ハンバ・ラジャは約160人と推定される。

ブキト・バトゥ地区のカンボン・ブル・バクル（Buru Bakul）には、ダトゥク・ラクサマナの下にいて、スルタンに直属する100人のハンバ・ラジャがいる。その首長はパンフル・カナイカン（kanaikan）である。カナイカンとは王の船を指す上級語であるが、彼らはスルタン個人のブラウを動かさなければならない。

さらにメルバウ（Merbouw）島に約120人、トゥビン・ティンギ島に約200人のハンバ・ラジャに属する人々がいる。彼らはそこに封地を得た王族の従者として来た人々である。

ダトゥク・ラクサマナの地域のラヤト・ラジャについては後に再び触れる。

⑥ プカン・バルのバンダルと配下の人々

ブキト・バトゥ同様プカン・バルでもバンダルの称号をもつ官吏がスルタンを代表している。バンダルはそこにいるハンバ・ラジャつまり4スクに属さないすべての人々の長である。4スクに属する人々は各々のパンフルの下にある。バンダルは支配下の人々に関してシアクのダトゥクと同じ権限をもち、また20ドルまでの処罰の権限がある。

4スクのパンフルは自分のスク・メンバーを10リアル（2.40ドル）まで処罰しうる。それ以上、20ドルまでは、バンダルと4人のパンフルが構成

するプカン・バルのカラパタンが扱い、さらにそれ以上はシアクのカラパタンが扱う。

プカン・バルのバンダルはもともとスルタンの官吏にすぎず、したがってウタン・タナをもたない。彼の収入は罰金における取り分の他には、1隻のプラウがシアク川で関税を免除されること（政庁はこの権利を200盾の年金で買収した）、4スクに属さない外来人が通過する時にかける通行税、そしてルパン（repang）〔網を結ぶのに用いる板〕およびブンゲルタンつまりトルブク魚の運搬にかかる税における取り分である。最後の2つも、後にバンダルに賠償を与えることなく禁止された。

これに対してバンダルはスルタンからウタン・タナを与えられ、その所有に関わるすべての特権を得た。彼に与えられたウタン・タナは、もともとスナプランのバティンが所有していたものであった（第2章c参照）。これがいつ、どのような理由でおこなわれたのか、まだ確かなことは不明である。おそらく、スルタンが自分の官吏にしかるべき給与を与えようとし、それがスナプランのバティンの犠牲においてなされたのであろう。このウタン・タナ賜与は、第4代バンダル、つまり現バンドルの父にヒジュラ暦1276年（AD1859/60）に与えられた任命勅書には記されている。この賜与がそれ以前におこなわれたのでないことは明らかである。というのは、プカン・バルのパンフルたちが断言するところでは、パンチョン・アラスとタパク・ラワンの徴収がスナプランのバティンから奪い取られたのちにバンダルだけがこれらを徴収し、その後これらが政庁によって（権力乱用だが）収用されて、パンチョン・アラス（およびタパク・ラワン）が廃止され、そしてこれらの徴収は1863年のリアウの理事官の布告によって禁止された。スルタンはバンダルに200盾の補償を与えたが、それは1回払われただけであった。

蜜蝋の樹の収入は、現在も主としてバンドルのものになっている。かつ

てはこれも主としてスナプランのバティンのものであった。ただしスルタンが求めれば、バティンはこれらを4分の3（5分の4ではない）の価格で供出しなければならなかった。

このバティンの下の人々はラヤト・ラジャに属する。彼らについては後に扱う。

プカン・バルのダトゥク・バンダルに従属するハンバ・ラジャの人数は約200人であろう。そこにはさらに40人のアラブ系の人々が住んでいることを追記しておこう。

⑦ トウラタク・ブルとティガ・カンボンの人々。

ティガ・ルハク、ティガ・カンボン、トウラタク・ブル（第2章 e, f, g 参照）に属する人々もハンバ・ラジャに数えることができる。彼らについては、上で述べた以上に述べることはあまりない。

ティガ・カンブンのパンフルとトウラタク・ブルのパンフルは、祭の時スルタンに各々1頭の水牛を供出する義務があり、それは1878年にはまだおこなわれていたといわれる。彼らはまた戦争の時コタ・インタンへ行を共にしたようである。

しかしながら、彼らはシアクに従属しているというより、シアクの保護下にあるというべきであろう。

(3) ラヤト・ラジャ

ハンバ・ラジャ以外のスルタンの直接の臣民すべてがラヤト・ラジャに属する。彼らの地位は一般にうらやましがるようなものではない。ハンバ・ラジャの場合はまだ、スルタンが少なくとも精神的に尊重しなければならない若干の権利をもつが、スルタンがラヤト・ラジャに残しているのは同情からくる恩恵（カシハン *kasihan*）だけと考えられている。彼らはか

つてヨーロッパで「王の意のままに税と賦役に服する」といわれたものに当たる。

現実はこちらでも理論ほど悪くはない。ラヤトが王の命令に逆らえないのは当然だが、従属が度を超すと、進入困難な自分たちの森の中に隠れることにより、王の命令を免れることができるからである。それゆえ王の側でも強く押さえずぎないように、つねに留意することになる。王にも自分の意志を押し通す力はなく、誰かに八当たりするしかないのである。

ラヤト・タントウラとラヤト・バナン

ラヤト・ラジャはさらに、名目的ムスリムであるラヤト・タントウラ (Tantera) とまったくムスリムでないラヤト・バナン (Banang) に分かれる。

ラヤト・タントウラはオラン・タラン (オラン・マンダウもこれに含めることができる)、そしてシアク川沿いに住むマレー人バティンの下の人々つまり第2章 b, c, d の土地を占取する人々である。さらにダトゥク・ラクサマナの地域に住むラヤト・ラウト (Laut), ブンカリスの4人のマレー人バティン, オラン・チェドウン (Cedung), オラン・スングラン (Senggeran) もラヤト・タントウラに含まれる。

この人々は、多くが漁業で生計を立てているラヤト・ラウトおよびブンカリスに住むラヤト・タントウラを除いて、主として稲作で生きている。彼らはすべて、飢えに強いられた場合、森林産物の採集もおこなう。

ラヤト・バナンに属するのはオラン・サケイ, オラン・アキト, オラン・ラワ, オラン・ウタンである。

① ラヤト・タントウラ

(a) オラン・タラン

本稿では混乱を避けるためにオラン・タランとオラン・マンダウを明確に区別している。これは、用語法の上では正しいけれども、実はあまり正しいことではない。タランとは本来川筋でなく内陸に住む人のことをいう。したがって、オラン・マンダウはタランの一種であり、事実彼らはタラン・マンダウとも呼ばれる。オラン・タランはふつうは、川岸近くにラデンをもつオラン・ムラユ (Melayu) との対比でそう呼ばれる。

オラン・タランがなぜ交通路から遠く離れた森の中を選んだのか、確実なことはまだ不明である。彼らのための場所は川岸にも十分にあったはずである。おそらく彼らがその権利を否定されたか、あるいは彼らが密林の中にいる方が安全と考えたからであろう。彼らの人口が相対的に多いことは、後者の彼らの考えが間違っていなかったことの証明である。

プラワンのバティン (第2章c参照) がどのようにしてクワラ・マンダウの上流で森を占取するに至ったか、まだ明らかでない。

先にオラン・タランとオラン・マンダウが住む土地について述べた際に、この人々について述べているので、煩を避けるため、そこを参照されたい (第2章b, c, d)。

スルタンはオラン・タランとオラン・マンダウに関してスラハン交易を導入した。これはスルトンの収入源であるが、スルタンはふつうその収入を自分の官吏の給与として、あるいは一族の者の生活のために彼らに与える。

スラハン交易

スラハン交易は鉄 (パラン) と塩だけであるが、住民の必要のほとんどがこの2つによって満たされる場合、スラハン交易をおこなう者以外がそ

の他の品物（とくにカイン）の商売をおこなうのが困難なことは自明である。スラハン交易は我々が塩と鉄の専売と呼ぶものに他ならず、その基礎にある考え方がそう悪いものでないことは否定できない。つまり、これによって、かなり隔絶して住んでいるオラン・タランの2つの主要必需品が相対的に容易に供給されるのである。この塩と鉄の価格は確かに高いが、いつでも、また遠すぎないところで手に入るのである。

しかしながら、シアクのような国におけるスラハン交易は、その任に当たる者がきわめて容易に悪用しうることも自明である。やはり住民はこの任に当たる者の善意に全面的に依存することとなり、不当な被害を訴え出ることは不可能であった。彼らも不服の申し立てが無駄なことをよく知っていたようである。とくに過去においては、アナク・ラジャはブルタランガンをいつも、自分の従属民の財産への欲望を満たすことが許される地域とみなしていた。あらゆる種類の産物に対する際限ない収奪と、あらゆる種類の無限の恣意がオラン・タランをして、高官が来ている間森の中に退避することを選択せしめ、その来訪が終わるまで森から出てこさせなかった。

第三者による密売は不可能である。住民があまりにも散居しており、かつ、それゆえ品物は特定の周知のところでのみ入手可能でなければならぬからである。加えて、スラハン交易はほぼ全面的に物々交換であり、入手した品物の搬出は当然秘密裡にはおこなえない。

スラハン交易は元々は合法かつ必要なことであったが、この国の発展にとって障害であり、生産力の向上の障害になっていることは改めて証明するまでもない。

オランダの行政の下では、次のようにいうことができる。必要な塩と鉄だけでなく原住民が使用するその他の品物の供給も、安んじて自由な競争に（第一に中国人にだが）委ねることができる。これによって原住民が買

う品物の値段が安くなるばかりでなく、原住民もより多くの森林産物の採集をおこなうようになるだろうし、彼らは自己の勤勉の成果が自己の利益になることをすぐに認めるだろう。

すでに述べたように、かつてはスンゲイ・マンダウ沿いのスラハン交易はビンタラ・キリに、プルタランガン（第2章d）のそれはビンタラ・カナンに、給与として与えられていた。しかし彼らは後にこれを失い、その代償として各々年に500盾を得、スラハン交易の権利は、再びトンク・ウヌスとトンク・スルン・ヌガラに与えられた。トンク・ウヌスはこれを請負に出した。最初はマラッカのマレー人に160ドルで、現在は中国人に180ドルで出しているが、これは間もなく200ドルになるだろう。トンク・スルン・ヌガラはこの権利を自ら保持したが、その運営はビンタラ・カナンに任せ、ビンタラ・カナンはその代償として収入の一部（2分の1といわれる）を手に入れる。

オラン・タランの税

スルタンがオラン・タランから得るその他の収入源はタバク・ラワンである。これは1ラダン当たり10ガンタン・パディのようであるが、少なくともタラン・ダユンに関しては（非合法に？）20ガンタン・パディまで引き上げられた（ヒジュラ暦1279年のビンタラ・カナンの任命勅書の第5条）。

同じ勅書においてさらに、オラン・ダユンが生産する油はすべて1ガンタンにつき1盾でスルタンに供出しなければならないと命じられ（第6条）、さらに彼らはパディを100ガンタンあたり3ドルでスルタンにだけ売らねばならず、これに対して、オラン・ダユンが後に米を必要とすることがあれば、スルタンから市場価格で、または先に売った価格の3倍で（!）買い戻すことができると定められた（第7条）。

このような規定から、我々は、こうした規定を生み出した前スルタンの

ような半精神錯乱の暴君の止めようのない恣意の下におかれた場合、オラン・タランのような従順な人々が必然的にどのような運命をたどるか、明らかにすることができる。

オラン・タランには上記の形態で王に納める税の他に、オラン・マンダウやシアク川沿いのマレー人バティンに属する人々（第2章b, c①②③, d）と同様、労役の義務があり、そのうちの重いものは国やスルタンの必要を満たすためである。王が自分自身あるいは国のために必要とする道や溝を作ること、砦を作ること、木を切ることなどである。

ラヤト・ラジャの首長

ラヤト・ラジャの上記のすべての首長は、スルタンによって任命される。彼らは、前任者のスクによって前任者のカマナカンの中から指名される。彼らの相続は父から息子への直系相続でなく、叔父から姉妹の子へとおこなわれる。

パンフル・マンダウは任命される時、上着、サロン、頭巾各1を賜与される。この頭巾は1カブン（kabung）つまり半尋の白木綿を、同じ大きさの黒木綿の中に巻いたものである（ダタル・ブルカブン datar berkabung）。これは養蜂を暗示する。つまり蜂の群も内（蜜蝋）は白く、外（蜂）は黒い。パティの称号をもつタラン・ダユンの首長が任命される時は、上着、サロン、黒い頭巾各1を与えられる。その他の首長はみな、普通のプルサリナンつまり上着、サロン、普通の頭巾各1が与えられる。

これらラヤト・ラジャへの王の命令は口頭で伝えられ、その伝令者には本物である証拠として矢を与えられている。その矢羽根のまわりに黄色い木綿布が、動くことができるように結び付けられている（ikat simpul sentak）。重要なことがら（たとえば重罪を犯した者の追跡）の場合には、この黄色い布は、決定的命令のしるしとして普通の結び方で矢羽根に付けら

れる。このしるしを持つ使者がやってくるという噂だけで人々は逃げ去ってしまうといわれている。

上記の首長たちの1人が王の命令に従わないままにいる、あるいは従うのを欲しない場合、彼は罪を犯した他の人々と共に王の前で、いわゆるアヤル・クリス (ayar keris) を飲むという罰に処される。ロンボク・スタン (lombok setan) [不明] を洗った水の中にクリスを浸し、それから滴る水を罪人の口の中に流し込み、罪人はそれを飲み込まねばならないというものである。その鋭いエキスは激しい狂乱状態を引き起こすだけでなく、災難をもたらすと信じられているので、これは非常に重い罰と考えられている。この罰が一旦終了すれば、スルタンはプルサリナンを与えなければならない。これは、いわば彼らを自分に再結合するためであって、それがおこなわれないなら、彼らは他所へ去ってしまう。

オラン・タランの人口は相対的にかなり多い。大まかな推定だが、オラン・ダユンだけで約800家族、オラン・ガシプ、オラン・クティブ、そしてバティン・パンダンに従属する者が約450家族、全オラン・マンダウ (オラン・グロンガンとジュクラ・パンダンの人々を含む) が約800家族、合計約2050家族つまり約9000～10000人の人口である。

(b) ラヤト・ラウト

全員がブキト・パトゥのラクサマナの領域に住むラヤト・ラウトは、上述のようにラヤト・タントウラに属する。

ラヤト・ラウトは定住地をもたず、ラクサマナの領域、リアウ・リング諸島、ジョホールとシンガポールのマラッカ対岸地域を移動している。

彼らは当地で結婚した場合にのみ当地にとどまり、ラダンあるいは漁業により生活する。彼らは9つのスクに分かれ、バティンの称号をもつ各々の首長の下にある。それゆえ彼らはしばしばラヤト・スンビラン・スク

シアク王国誌

(rayat sembilan suku) と呼ばれる。9つのスクの名はスンプルン (Sembulun), グラム (Gelang), クルマン (Kelumang), コピト (Kopit), スミ
ンボ (Semimbo), スバブイ (Sebabui), ラディ (Ladi), トゥングン
(Tengayun), プラユン (Perayun) である。現在スンプルン, クルマン,
スバブイ, コピトだけがシアクにいるようである。ラジャ・ヌガラ (Raja
Negara) なる者が彼らの首長であり, この4スクの前3者の中からスルタ
ンにより任命される。最後に任命されたラジャ・ヌガラはすでに数年前に
シアクを去り, 現在はジョホールのマハラジャに仕えているはずであり,
人々のいうところでは, ジョホールの王の建物のいくつかを監督している。

当地でラヤト・ラウトと呼ばれる人々の首長は, 数年前リングにいたら
しいオラン・カヤ・マパル (Orang Kaya Mapar) なる者だが, 彼は任命
された時オラン・カヤ・トゥムグン (Tumenggung) という称号を得た。
彼が今もなおその職にあるかは不明である。

シアク (プキト・バトゥ) に定着しているラヤト・ラウトの人数は現在
約400人以下である。つまり彼らの大部分が去っていったということ
である。

筆者は群島内の他の地域におけるラヤト・ラウトについて知ることがで
きず, したがって, 彼らがなぜ, いつシアクに定着したのか述べることが
できない。しかしおそらく次の推測が妥当であろう。彼らはシンガポール
のラジャ・ヌガラの子孫であり, ラジャ・クチルが祖父 (ジョホールのラ
クサマナ) によってラジャ・ヌガラに託され, ラジャ・クチルのジョホー
ル, リアウ, そしてその後のシアクに対する企ての際, ラジャ・ヌガラは
人々を率いてこれを援助したのであろう (上記参照)。ラヤト・ラウトの
首長が当地で保持し続けるラジャ・ヌガラという称号はおそらくこのこと
によって説明できよう。

ラヤト・ラウトの慣習によれば, 奇数番目の子供は母親, 偶数番目の子

供は父親に従い、そのため奇数番目の子供たちは母親をのみ、偶数番目の子供たちは父親をのみ相続する。末子が奇数番目の子供の場合は、母親が父親より1人多く子供を有することになるが、実は初めは両親のどちらかへの帰属を決めず、後に分離すべき年齢に達した時、その子がどちらに属したいか決めることができる。この選択がおこなわれるまで、この子はマタ・マラン (mata malang) つまり我々の表現でいう斜視と呼ばれる。

ラヤト・ラウトがシアクにおいて負う若干の義務は、ラダンを設ける者のタバク・ラワンと森林産物を採集する者のパンチョン・アラスの他、船団の労務あるいは一般にスルタンが発する船を動かすことである。

以上から、ラヤト・ラウトがウタン・タナをもたないことは明らかである。

(c) ブンカリスの4人のバティン

ブンカリスの4人のマレー人バティン（彼らと配下の人々はラヤト・タントウラに属する）はふつう、他のラヤトと区別するために、ラヤト・ヤン・ムムガン (rayat yang memegang) ・ウタン・タナ、つまりウタン・タナを所有するラヤトと呼ばれる。その土地は現在政庁に割譲されたブンカリス島にあり、そのブラウウェル海峡に面する部分である。

この4人のバティンとは、ブンカリス、プヌバル (Penebal)、スンドウラク (Senderak)、アラムのバティンである。彼らはかつてラクサマナの支配下にあり、その4スクを形成していた。

彼らのウタン・タナは任命勅書の中でラクサマナに与えられた。この賜与自体が不法行為であるばかりか、これについて述べる勅書の文章も大変不明瞭であって、4バティンの地域はラクサマナがアヘンと塩の専売権を持つ地域の中にあると解することもできる。

いずれにせよ、伝承によれば、そして明らかに正しいことであるが、こ

シアク王国誌

の4人のバティンがブキト・バトゥのラクサマナより以前にブンカリスに
ただけでなく、ラジャ・クチルがシアクを征服するずっと以前からそこ
にいたことは確かである。

ブンカリス島が政庁に割譲された時、ラクサマナの権利も、この元来の
住民の権利も考慮されなかった。スルタンには、あまり多くの収入をもた
らさないこの土地の主権放棄に対する賠償が支払われた。他方スルタンは、
この賠償から、共にシアクの国を征服したゆえにブンカリス島にも共に権
利を有するので、当然賠償にも権利を持つと考えられる、シアクのダトゥ
クたちにも何も与えなかった。その上、彼らのアナク・ブワがそこに住んで
いたが、この割譲によって、ダトゥクたちはこのアナク・ブワを失った。

この4人のバティンの下の人々のほとんどはブンカリス島にとどまり、
現在は政庁の臣民である。ブンカリスのバティンの下にある者は、ブキト
・バトゥに定着したか、あるいはそこに留まったままである。

島の割譲後のこれら旧バティンたちについて何も述べるべきことがない
が、彼らに何らかの方法で賠償を与えるのがよいと思われる。たとえば、
彼らの土地に対する古くからの権利が否定されたことによって彼らが受け
た損害を償うために、彼らをクバラ・カンボン (kepala kampong) [集落
の長] にするという形で。

ブンカリスのバティンがブキト・バトゥのラクサマナの地域内に持つ土
地については第2章kを参照。

この4バティンのアナク・ブワはシアクでは約400～500人と推定されて
いる。

(d) オラン・チェドウンとオラン・スングラン

先に述べたラヤト・ヤン・ムムガン・ウタン・タナに対して、ラヤト・
ヤン・ティアダ・ムムガン・ウタン・タナ、つまりウタン・タナを持たな

いラヤトに、オラン・チェドゥンとオラン・スングランがいる。彼らはジョホールからきたといわれる。とすると、彼らはラジャ・クチル以前からシアクにいたのであろう。そうでなければ、彼らが、ラジャ・クチルと共にあるいは後にきてハンバ・ラジャとなった他のジョホール人よりも、不利な状態におかれている理由が説明できない。

オラン・チェドゥンはさらに、サワン (Sawang)、ピアナン (Pianan)、トゥタマ (Tetama)、チェドゥンの4つに分かれ、各々独自の首長の下にある。サワンの首長はジュナン (Jenang) という称号をもち、他の3人はバティンの称号をもつ。

オラン・スングランは1人のバティンの下の1つのスクをなす。

この種のラヤトのほとんどは、ブキト・バトゥのダトゥク・ラクサマナの領域に住む。一部分がシアク川下流部に住む。たとえばピアナンのバティンとトゥタマのバティンはゴンタン島に住む。

彼らの大部分がスルタンからラクサマナに与えられた地域に住むとはいえ、彼らはスルタンに直属する。それゆえラヤト・ラジャとかラヤト・ダラムと呼ばれる。

彼らのスルタンに対する義務は次のとおりである。チェドゥンのバティンとスングランのバティンはスルタンが発するサンパンを動かさねばならない。サワン、ピアナン、トゥタマのバティンもその義務があるが、サワンのバティンの主要な任務はアタブ (atap) の供出である。他の2者の主要な任務は、必要とされるプラウの櫓および銃の運搬具の供出である。

これらラヤト・ダラムが何らかの違反を犯した場合、彼らは首まで水に浸けられる。人々はこの罰を非常に恐れ、よく耐えうるものでないという。目撃証人によれば、4分の1時間あまり水中に浸けられてから引き上げられると、半死以上のひどい状態であった。スルタンはこの処罰の後、その者にプルサリナンを与える。

シアク王国誌

オラン・チェドゥンとオラン・スングラン合わせて、現在150～200人よりあまり多くない。とくにこの両グループの人々が大半してこの国から立ち去っており、これに関する情報が正しいならば、彼らはかつては数千人を数えたはずである。

② ラヤト・バナシ

シアクにおける社会階層の再下層にラヤト・バナシ、つまりいまだ無信仰なる者がいる。島々に住む若干のオラン・ウタシのような、イスラムに改宗して日が浅い者もこれに含まれる。ラヤト・バナシはオラン・サケイ、オラン・アキト、オラン・ウタシ、オラン・ラワに区分される。

(a) オラン・サケイ

オラン・サケイは、明らかにスマトラ東海岸州とマレー半島の古来の部族である。1878年10月4日233号の新聞『ドウ・ロコモティーフ (De Locomotief)』に、マレー半島のキンタ (Kinta) 郡の官吏の報告書の一部が掲載されており、その内陸部に住むサケイ人に関する記述は、シアクに住むサケイ人と非常によく一致する。そこでも龍脳語が知られている。

シアクでは彼らは、上マシダウおよびこれに接するロカン地域を占取している。上マシダウのシアクに属する者は5つのスク、ロカン地域の者は8つのスクに分かれ、各々独自のバティンがいる。それゆえ彼らはバティン・リマ (Lima)、バティン・スラパン (Selapan) と呼んで区別される。

シアクのオラン・サケイつまりバティン・リマが占取する地域、およびオラン・サケイ自体についてはすでに第2章kで述べたので、繰り返さない。

サケイ人は、若干の独自の単語を交えたマレー語の方言をしゃべる。龍脳の採集にでかける時にのみ、まったく異なる言語つまり龍脳語をしゃべ

る。龍脳語についても上ですでに触れた。

サケイ人の言語と慣習についてもっと研究がおこなわれるなら、マレー人種の出自と分布に関する多くの不明な点を明らかにすることができるだろう。

サケイ人は、ほとんど進入不可能な彼らの森から出てこない。彼らは森の中で食用森林産物の採集やウビ〔芋〕栽培によって生きている。彼らは塩と鉄器を、マンダウ川のスラハン交易請負人から手に入れる。1878年のこのスラハン交易請負人によると、マンダウ川での塩の販売は1年に約1000ガンタンである。

彼らの食糧の大きな部分を占めるのは、野豚およびシアクでナンゴイ(nangoi)と呼ばれる動物である。ナンゴイは野豚と似たところがあるといわれる。これがどんな動物なのか筆者はいうことができない。現物をみたことはないし、書かれたものからも不明である。それは1年のうちのある時期に非常に多いようである。

サケイ人が必要とするものは非常にわずかである。彼らの普通の衣服は、男はチャワト(cawat)つまり腰の回りの長い布で、その足の間のある1点がしぼられているものであり、女は一種のスカートである。どちらもポホン・チュルプ(pohon cerep)の皮を叩いたものでできている。家具は竹で作る。

サケイ人は森の動物を狩るのが非常に巧みであるにちがいない。短い槍さえ手にしていたら、虎に出合うのさえ恐れないといわれる。

彼らの宗教については、死者を埋葬する前に死者に敬意を示すということから、宗教を持っていることがわかっている。もし彼らが後世とか人の運命に影響を及ぼす超自然的な霊または神といった観念を持たないならば、当然死者に敬意を示すことはないだろう。

ある人が死ぬと、残された人々は、屍の回りに集まりパランで額に小さ

い傷をつけ、自分たちの血を少しだけ屍に落とし、その後に屍を土に埋める。

理論的には彼らは王に対して権利を持たないが、実際には彼らは義務を持たない。彼らは森の中で自由に生きている。彼らが無視されているのではなく、彼らから規則的に収奪するのが不可能だからである。第一に、彼らは精神と技術以外の何物ももたず、第二に、彼らの森の中で彼らを捕まえるのはマレー人には不可能だからである。

彼らはみつけたグリガとガハルの木をすべて、無償でスルタンに供出しなければならぬが、実際にはその一部しか供出しない。彼らがそのほとんどを接触可能な商人に売るとは自明である。ごくたまにバティンが1つか2つのグリガと若干のカユ・ガハルをスルタンに供出し、スルタンはこれで満足する以外ないのである。

サケイ人はけっしてスルタンと直接接触せず、マンダウ川におけるスルトンの代理人（現在はマト・サレ Mat Saleh という）と接触する。バティンが死ぬと、このスルトンの代理人によってスルタンに伝えられ、同時に新しい候補者が（人々のいうところでは、前任者のカマナカンから）指名される。そしてスルタンは、新任の者に承認のしるしとして上着1つを送る。サケイ人に対するスルトンの規則的な統治が問題外あるいは不可能であることがわかる。

またどこでバティン・リマが終わり、どこでバティン・スラパンが始まるのかも不明である。彼らの森が広大なので、彼らは、伝染病によってであれ、各々の王の欲望ゆえにであれ、必要な場合には、互いに妨げあうことなしに、互いの地域を行き来できる。現在バティン・スラパンのサケイ人が大勢コタ・インタンの都の近くを去って、上マンダウの方に集中してきているといわれているが、シアクの体制の方が彼らに適しているようにみえるからであろう。

シアクに属するサケイ人の数は約4000～5000人と推定される。

(b) オラン・アキト

オラン・アキトはオラン・サケイ同様、様々な点で不明な人種である。オラン・サケイは東スマトラの低地地方の元来の森の住民のようにみえるが、オラン・アキトはマラッカ海峡の南部の海岸やその中の島々の海岸の、スマトラ側、マラッカ側、また島々において、様々な名前を持つ原住民の一部分をなす。これらのオラン・アキトの一部は海からあまり離れていない地上や、あるいは船や筏の上に住む。

シアクのアキト人は2つのスクに分かれる。スク・アキト・ブンゲリンとスク・スラト・マロンである。

スク・アキト・ブンゲリンはシアク川河口の右岸タンジョン・ラヤンからスンゲイ・ブンゲリンまでに住んでいた。彼らが占取したこの土地は非常に狭く生産も少なかったので、彼らはここを去って筏でシアクをさかのぼった。彼らはマンダウ川のクワラ付近に定着し森林産物の採集に生計の道を見出し、ある者はラダンに生計の道を見出した（第2章 i ①参照）。

アキト・ブンゲリンの人口は、男は70～80人以上でないと推定されている。

スラト・マロンのアキト人はさらに2つに分かれる。本来のオラン・アキトとオラン・ラタス（Ratas）であり、各々バティンの下にある。

シアク川沿いにクワラ・マンダウからスンゲイ・ルクトまでの土地を占取するアキト・ブンゲリンがアキト・ラタスである（第2章 c ④参照）。したがって彼らがスラト・マロンの出身で、王の命令によってか、自身の動きによってか、ある時現在の場所に定着したことは明らかである。そうでなければ、彼らがどのようにして、またどこから、海を遠く離れた、マレー人に囲まれたここに来たのか、説明できない。人数は多くなく、おそ

らく40～50人以下である。

彼らのスルタンに対する任務は、カジャンおよびスルタンが必要とするすべての木を供出することである。

アキトのバティンの任命は、全面的にスルタンの選択による。スルタンはその際、サケイ人の場合と同様、上着を与える。

スルタンへの反抗あるいは命令不服従の場合、ラヤト・ラウトやラヤト・ダラムの場合と同様、バティンは長時間首まで水に浸かる（ルンダム rendam）罰を受け、この処罰の後、やはり上着を与えられる。

プラウ・ルパトに住むオラン・アキトは約200人と推定される。

すでに述べたように、オラン・アキトはまだ無信仰者であり、またイスラムに改宗しようとする傾向がないといわれる。それは彼らが非常に好むノンゴイの肉が禁止されることになるからである。彼らはこの動物を捕まえるのが非常に上手である。

(c) オラン・ウタンとオラン・ラワ

シアクの住民でさらに取り上げるべきはオラン・ウタンとオラン・ラワである。この両者の間に本質的な違いはないように思われる。少なくとも、後者はスンゲイ・ラワ沿いまたその近くのスマトラ本島上に住むオラン・ウタンに他ならない（第2章 i ②参照）。彼らはあちこち移動している。ある時は本島から対岸の島々へ、またある時は逆に。

オラン・ラワは20～130人といわれ、バティンの下にある。

オラン・ウタンは、シアク川とカンバル川両河川の河口の近くにある島々の元来の住民である。上に述べたように、ブンカリスの4人のマレー人バティン（ブンカリス、プヌバル、スンドウラク、アラム）がブラウウェル海峡沿いの土地を持つが、その他の部分にオラン・ウタンの2人のバティン（クンブン Kambung のバティンとバンタン Bantan のバティン）の下

の人々が分布している。

パダン島では元来の住民はオラン・ウタンだけだが、この人々についてはこれ以上のことは不明であり、人口は約200人と推定される。この他そこには本島から来てラダンを作る若干のマレー人と材木を伐る中国人がいる。

ムルバウでも元来の住民はオラン・ウタンである。その一部はイスラムに改宗しているが、おそらくそこに住んだシアクの王族たちの影響によるものである。土着の人であってハンバ・ラジャではないムルバウの住民はムルバウ、アポン（Apong）、チンタイ（Cintai）の3人のバティンの下におり、合計約300人である。

ムルバウ島および近くのトゥビン・ティンギ島にハンバ・ラジャが住んでいて、この人々はそこに住むトンク（Tongku）の下にある。各々120人、200人と推定される。

トゥビン・ティンギまたはランタウ（Rantau）、およびランサン（Ransang）またはムダン（Medang）の島では、住民は5つに分かれる。各々スミル（Sumir）、クリンバン（Kerimbang）、グラン（Gelang）、ムレイ（Melei）、パンチョル（Pancor）のバティンの下にあり、前4者はムスリム、最後のものはまだ無信仰者である。前4者のバティンの下の人々は、少なくとも名目的にはムスリムになっているが、彼らの出自はこの島々のその他のオラン・ウタンと同じである。この5人のバティンのアナク・ブワは合計600～700人と推定され、この人々がこの2つの島に散居している。たいていは2つの島を分ける海峡に面する部分に住んでいる。